

平成19年度第3回教育制度等専門部会会議録

- 1 開 会 平成19年9月27日（木） 午後1時30分
- 2 場 所 三条市役所栄庁舎3階大会議室
- 3 出席者 三条市教育制度等検討委員会教育制度等専門部会委員：雲尾周、白鳥友宜、坂内孝治郎、小熊セイ子、鈴木さゆり、金子周一、左近武、柴野ひさ子、鈴木照司
- 4 説明のための出席者 松永教育長、阿部教育次長、池浦教育総務課長、駒澤学校教育課長、須佐社会体育課長、坂井学校教育課主幹、長谷川教育総務課長補佐、山川学校教育課長補佐兼統括指導主事、本多教育総務係長、志賀学校教育課指導主事、山本学校教育課指導主事、西山学校教育課派遣指導主事

5 会議次第

- (1) 開会
- (2) 開会のあいさつ
- (3) 協議
 - ・ まとめ
 - 第1回教育制度等専門部会（6月28日）
 - 第2回教育制度等専門部会（7月12日）
 - ・ 今後の基本的な方向
 - 三条市の進める小中一貫（連携）教育
 - 期待される効果
 - 実施に向けての課題
- (4) その他
- (5) 閉会

6 協議の結果及び経過

(1) 開会

(司会)

第3回の教育制度等専門部会にご出席いただきありがとうございます。本日で教育制度等専門部会は全て終わりになります。

(2) 開会のあいさつ

(松永教育長)

第3回の教育制度等専門部会にお忙しいところご出席いただきありがとうございます。今回の第3回目です。できるだけ専門部会のまとめをしていただきたい。1回目、2回目は、いろいろな角度からご審議いただいた。第3回は、今後の方向等についてご

協議いただきたい。

2回の専門部会の協議を私なりに総括して大きくまとめると、三条市の子どもの実態を学力や生徒指導上から考え、その向上あるいは改善を図るには、教師の指導力あるいは教師の資質向上が本当に大事になる。しかし、資質向上は今の枠のなかだけではなかなかうまく機能しないのではないか。6・3制のフレームを4・3・2の区分に分けるなかで、対策を講ずることが教師の資質向上、ひいては子どもの学力向上につながるというような話を承った。また、三条市にせつかくある歴史や文化を子どもたちの教育の活かすことによって、人々や自分の住む地域を大事にする気持ちをもたせる努力も必要なのではないか等々のご意見をいただいた。

これらの視座を踏まえた上で今後の方向等について、ご協議いただきたい。第3回の専門部会をもって、一応専門部会は終了させていただき、中間のまとめをして、全体会へもっていきたいのでよろしくお願ひしたい。

(3) 協議

(雲尾委員長)

第2回の議事録が配布されているが、ご確認願ひたい。よろしければこの議事録を公表する。

協議に入る。第1回・第2回のまとめを述べてから、その後、今後の基本的方向ということで説明がある。事務局から説明をお願ひしたい。

(駒澤学校教育課長)

平成19年度第3回教育制度等専門部会、検討項目「まとめ：第1回教育制度等専門部会、第2回教育制度等専門部会」「今後の基本的な方向：三条市の進める小中一貫(連携)教育、期待される効果、実施に向けての課題」説明(配布資料参照)

(雲尾委員長)

2回分のまとめと今後の方向について説明いただいた。質問等があったらお願ひしたい。

(白鳥委員)

今回の資料等非常に分かりやすく簡潔にまとめてあり、よく理解できた。

全体にかかわることなので、一番はじめに聞かせてほしい。課長の説明では「小中一貫連携教育」と言っていた。ところが、表記の方では括弧連携となっている。最後まで聞いて、今後の進め方等を考えると、小中一貫、真ん中のところに中黒、それから連携という(小中一貫・連携教育)表記の方がよりよく分かるのではないか。市の実態にも合うのではと思った。連携が括弧に入っている意味を教えてください。

(駒澤学校教育課長)

作成されている資料と私の説明で若干のずれがあったことは、大変申し訳ない。学校教育課では、連携の三つのタイプのなかには一体・併用・連携があり、いろいろな諸般の事情から連携型もあると考えている。一貫教育がメインということには変わらない

い。ただ、そこにいくまでに連携校という形もある。

(白鳥委員)

そう思ったが、あえて言わせていただいた。

(金子副委員長)

3ページの学力向上では、確かにこのような話し合いだったと理解している。

一つ目の小学校の5年生から中学校1年生の時期(中期)が大きなポイントであるとしている。一貫教育の提案のなかで、この時期を一つのまとまりとして考えていることに大きな意味があると思うが、もう一度大きなポイントであるという意味を確認させてもらいたい。

(駒澤学校教育課長)

今まで検討委員会を進めてきたなかで説明してきたことと重なるが、例えば学力の向上についても、生徒指導のいじめ・不登校についても、中1ギャップ現象は小学校5年生のところで兆候がある。実は中学校になってから不適應の状況が現れたのではない。学力向上でも、系統的な指導、学び方の違い将来の目標に向かう意識付けの問題等がある。また、生徒指導でも、いろいろな子どもの内面的を考えたとき、自己肯定感や自分が大事にされている、仲間に認められているといった意識が下がる時期でもある。そういったことが中学校に入って中1ギャップ現象として現れる。また、子どもたちの身長や体重も大きな変化が現れるが、初潮の時期も早くなり思春期が1年から1.5年早くなっているという指摘もある。それで大きなポイントとしてあげさせていただいた。

(白鳥委員)

三条の地域、それから11ページの内容や12ページのモデル図等があるが、将来的に一体型にもっていくのは予算面からかなり難しい部分がある。そうするとよくて併用型のところへ近づくというところだと思うので、連携が括弧のなかに入っていると、一貫と連携では、連携が弱いというような気がした。真ん中のところに中黒を入れて、一体型ないしは連携型というほうがいいと考えた。

(金子副委員長)

関連して、今後の基本的な方向というところの説明を思い出している。これから進められていくプログラムづくり等で気になるのが、13ページに3つのモデルタイプ(一体型、併用型、連携型)に応じて、プログラムづくりや課題が違ってくるのではないかということである。作成したプログラムが連携型でも使えるのかどうか。資料では連携型はかなり△(効果有り)があって、実質的には連携型は一体型や併設型と違う内容になることもありうると思う。それを一度に課題としてやろうとすると、推進委員会では3つのモデルタイプに応じた検討しなければならなくなる。連携型は過渡期の問題で、一つのモデルプランで微調整しながら実施するなら括弧になる。見通しや今後の課題と関係してくるので、考え方を聞かせてもらいたい。

(白鳥委員)

大きな意味の差が後になって出てくる。

(駒澤学校教育課長)

そのことについては時間をかけて検討していない。私見として述べさせていただく。3つのモデルを作ることは、大変な作業になる。できればモデルプランなので、各学校や地域、または、連携型、一体型、併用型で暫時活用しながら、変化をもたせながら取り組んでいただきたい。

(雲尾委員長)

今、2点の問題が出ている。「小中一貫(連携)教育」という表現の問題。それから、一貫カリキュラムを一体型、併用型、連携型で通して行うことは可能であるかという点が問題となっている。これについて意見はないか。

まず、1点目の「小中一貫(連携)教育」の表現の問題だが、括弧を外して中黒(・)でつなぐという意見もあるが、「小中一貫教育」という言葉と「小中連携教育」という言葉か、あるいは「小中一貫連携教育」という言葉か、そもそもどっちに置き換えているのか区別がつかない。この括弧して連携という言葉は一貫に代わる言葉として入っているのか、続けて入る言葉として入っているのか、どちらなのか。

(駒澤学校教育課長)

あくまでも一貫、一体型を三条としては目指していきたい。しかし、いろいろな実態もあるので、その前に併用型や連携型もあるというとらえかたをしていただきたい。

(雲尾委員長)

読み方としては、「小中一貫教育」という言葉と「小中連携教育」という言葉を並べて書いたらこういう表現になるということか。

(駒澤学校教育課長)

はい。

(雲尾委員長)

そうであるならば連携はとってしまってもよい。基のイメージにあるのが「中高一貫教育」であろう。中高一貫教育の場合であると、完全な中等教育型のタイプ、いわゆる一体型というタイプと、それから併設型というタイプの設置者が同じで中学校、高校を併設しておく場合、それから設置者が違う場合の中学校と高校による連携型がある。設置者が違う中学校と高校の場合も含めて3つ合わせて中高一貫教育と一般的には表記されている。

小中一貫教育の場合でも、学校が別々に分かれていて連携型であっても、今の表現を踏襲すれば小中連携教育という言葉になる。三条市における提案は、従来の小中連携教育ではなくて、完全にカリキュラムの一体化を目指した新しい小中一貫教育のなかの連携型であると考えれば、小中連携教育という表現を使うと今までの小中連携教育と一緒にされてしまう。そういう意味でも小中一貫教育と言い切ってしまうと、そ

の中に連携型があるというほうがよい。

各学校では小中連携教育は、多かれ少なかれ行っている。例えば、6年生が一日体験で中学校に行ったり、中学校の先生が出張授業で小学校の専科で教えに入ったりなどある程度小中連携は行われている。このように今まで各学校が独自に行ってきた連携教育ではなく、一貫型を前提とした小中連携で、小中一貫教育のなかの連携型であると言った方が誤解を招かない。いかがか。

括弧連携の括弧はとって、話を進めたほうがよいという意見である。

(白鳥委員)

「小中一貫(連携)教育」では、いろいろな考え方ができるので、考え方、概念を共通にして話し合いたい。考え方や概念を共通理解しないと発言がふらふらするので、委員長がまとめにくくなると思う。はじめにはっきりさせたいと考えた。

(鈴木照司委員)

小中一貫教育を目指すのが大前提。小中一貫教育の中に、そのやり方として一体型、併用型、連携型があると考えると分かりやすい。

あくまでも小中一貫教育を推進するという、大きな目標に向かってこんな方法があると理解したほうがよい。これからPTA、地域に説明する際に自分の子どもは一体型だとか、併用型だとか、連携型だとかになる。そうすると格差を感じていつになったら本当に一体型になるのかと言われるので、はっきり教育委員会としては将来的には全部の学校が一貫教育を目指すけれど、段階として併用型や連携型がある。こういう実情のなかで1つのプログラムやカリキュラムだけれど、そこにある程度いろいろなニュアンスを加えて、プログラムを修正していくと言ったほうが分かりやすい。

(雲尾委員長)

議事の途中だが、「(連携)」をとるということで、以下話を進めてよいか。それでは、1点目の表記については、今後、小中一貫教育と表記する。

もう1点、小中一貫カリキュラムを作ったとしても連携型や併用型でどの程度完全に実施できるのか懸念が示されている。それに関係してもよいし、それ以外でもいなので、意見・質問はないか。

(鈴木照司委員)

18ページ教職員の意識改革、その現状で「小中9年間を見通した指導観」とあるが、今までは指導力という表現だったが指導観と今回特に表現したのはどうしてか。

(駒澤学校教育課長)

小中連携に今まで取り組んできたが、どうしても中学校の教師は小学校でこんなところも押さえてきていないのかと思うことがある。小学校の教師はどうしてあんないい子が中学校であんなふうになるのかというような会話になる。小学校のきめ細やかな指導、学級担任の丁寧な関わりと中学校の専門性を活かした指導には、どうしても違いがある。小中の教職員が力を合わせて一人の子どもを9年間でどう育てるのか、

将来どう育てていくのか、義務教育としての基礎部分を9年間のスパンで、小学校は小学校、中学校は中学校ではなくて、それぞれの指導法はあるけれど、協働していききたいという意味で指導観という言葉を使った。

(西山派遣指導主事)

小学校の教師は、小学校6年間のカリキュラムを知っている。6年間をどう指導しようという考え方やノウハウをもっている。中学校の先生も中学校3年間をどのように指導しようということは考えている。ところが、中学校の先生は小学校1年生にどんな子どもがいてその子どもたちがどのように育ってきて今があるのかということはいあまり知らない。小学校の先生は小学校のやったことがどの程度どこで中学校につながっていくのかというはいあまり考えない。小学校の6年間で成果をあげよう、中学校の3年間で成果をあげようという考えはある。しかし、9年間を見通して小学校でここまでやっておくとうまく中学校につながられるとか、小学校のこの部分を中学校でも取り上げれば中学校でもうまくつながれるというような指導に対する考え方は、なかなか定着していない現状があるので指導観という言葉を使った。

(鈴木照司委員)

了解。大きな視点に立ってという意味か。

(柴野委員)

知識詰め込み型、知識注入型の教育ではなくて、探求型、生涯学習につながる学びがこれからの時代では求められている。学校が終わったからといって学びは終わりではない。生涯学習につながる学びのスタイルを義務教育の間に身に付けなければならない。それには、知識注入型ではなくて、学習意欲を育み、子どもが人とのかかわりの中で知識を活かす、そういう学力観をとらえた。小学校の先生、中学校の先生と分けるのではなくて、小学校にも中学校にも未だに知識注入型がある。生涯学習に結び付くような学習指導の仕方を考えるべきだと思っている。

(金子副委員長)

2つ願う。一つ目は11ページでモデル校を指定して進めていくと書いてあるが、このモデル校は3つのタイプのどれになっていくのか。二つ目は、13ページのモデル校の比較で、併用型で教育目標の共有のところは△になっているが、△でいいのか。△は効果有りだから、なんとも言えないところもあるが、◎(大きな効果有り)があつて、○(かなり効果有り)があつて、△で×(効果無し)ですので、×がだめで、あと3つはいいととらえればいいのかもしいないが、併用型もかなり進めていこうとなると、教育目標の共有が△というのがどうなのかなと思う。ここは○にならないのか。○にすれば併用型は教育目標を共有する形でのプログラムづくり、教育課程づくりになっていく。△ということは、そうしなくてもいいと受けられる。その辺のところはモデル校が具体的に進めていくときに困らないか。連携型も×がなくて、みんな△なのでいいかということも出てくる。そう考えると大事な部分である。こ

ういう意味で△という説明をいただきたい。

(白鳥委員)

関連して、一貫・連携ととらえると一番共有しなければならないのは教育目標だと思う。そう考えると◎、△、△が、仮に△が○になったとしても違和感がある。このところは全部◎ではないか。併用型、連携型というのは、かなりの部分で独自性があるのだから、教育目標を実践していく中でのアレンジということになる。

(柴野委員)

併用型で教育目標の共有が△となっていておやっと思った。三条市は、中学校区単位でずっと学力向上をやっているのだから、三条市の場合は◎になると思う。連携にしても同じだと思う。小学校の場合は、全校体制で研究を容易に進めることができるが、中学校は全校体制で取り組むのは難しいというように感じている。小学校も中学校も全校体制でやるのであれば◎になると思う。

(雲尾委員長)

シート11のモデル校とシート13の特に教育目標について説明をお願いします。

(駒澤学校教育課長)

モデル校が一体型なのか併用型なのかということは、ここはソフトの面を協議する専門部会でもあるし、これから全体会もあり、財政面もあるのでここでは考えを言うことは控えさせていただきたい。

(西山派遣指導主事)

△にした理由は、教育目標は根幹部分であり共通理解することは容易ではない。共通理解をするには、教育目標を各部門に浸透させなければならない。一体型で小中一緒の教務室に小学校1年生の担任から中学校3年生の担任がいれば、話し合いの過程で教育目標がどこまで浸透しているのか確認しながら進めることができる。それが、小中の校舎が離れてしまうと難しくなる。全教職員が教育目標を共通理解して進めるためには、やはり同じ校舎に小中の教職員が一緒にいないと難しいという意味である。しかし、委員のご指摘ももっともであるので今後の検討課題にさせていただきたい。

(白鳥委員)

だからこそ共通理解が必要であり、あとは学校の実態、地域の実態に応じて、その言葉、表現方法を考えればよい。理念としては、一体型を目指すという考えではないか。

(金子副委員長)

この△というのは共有するための困難度が高いというように理解すればいいのか。教育目標が別々でばらばらでいいのだという意味ではなくて、共有化するための難易度が高くなるからそこを十分に留意してほしいという理解でよいか。

(駒澤学校教育課長)

はい。

(鈴木照司委員)

困難度が高いのであれば、そういう表記あるいは注記を示しておく必要がある。困難度が高いので△ということを感じ取れるように注記がないと、小中一貫教育をやるのに教育目標の共有が△とはどういうことかという質問が出る。

(駒澤学校教育課長)

このことについては検討させていただく。与らせていただき、全体会で提案するというご理解をいただきたい。

(雲尾委員長)

今日の専門部会の資料を基にして、全体会で報告する際に今のような内容を盛り込んだ表記に変えていくということよろしいか。

(白鳥委員)

15ページ、学力向上のページで、対策の最初のところに9年間を見通した教育の展開という表記がある。二つ目には、基礎的・基本的事項、次に自ら学ぶということもある。それらのことから児童生徒の実態を押さえておく必要がある。子どもたちの生活実態等を把握することについてはどの程度考えているのか。特にそれが自ら学ぶという、学習方法の指導まで入ってくるとなかなか難しい部分だと思うのだが。

(西山派遣指導主事)

資料20ページの実施に向けての課題3、保護者・地域への説明と成果の検証のなかで、(3)定期的なアンケート・学力調査・外部評価等の情報収集及び分析と指導・支援の充実をあげている。当然、多角的に子どもたちの生活実態等を踏まえながら経年で成果を検証したい。また、皆様方から分析したことについて外部評価をいただきながら、検討したいと考えている。先進地の呉や品川も質問紙を使いながら、学習意欲の調査等を行っていた。それが三条の子どもたちに合ったものかを吟味し、調査方法についても適切であるかどうかを検討したい。今後、モデル校から始めていくのか、いつ頃実施するのか等の細かいところまで詰めながら把握していきたい。

(鈴木照司委員)

質問。13ページ。三つのモデルの比較のページの枠外に「※連携型の学校は、順次併用型や一体型を目指す。」と注記があるが、一体型と併用型は永久に残るのか。併用型は、一体型を目指すと書いていないから、両方とも、そもそも三条市においては残るという大前提なのか。

(駒澤学校教育課長)

9年間を同じ学び舎で学習させたいという理想的な考えをもっている。しかし、いろいろな地域性があったり、校舎の施設面等もあったりして、あくまでも一体型を目指すけれども、連携型から入ったところは併用型、併用型で入ったところは一体型をまずは目指すということになる。いろいろな事情があるのでその辺の含みもあるということで理解をいただきたい。

(柴野委員)

11 ページ。地域性を活かした系統的なものづくり教育プランの作成を謳っていただきうれしく思う。三条は教育資源に恵まれた地域である。科学教育も含めた地域学習で下田では子どもたちが変容してきている。技術教育とか職業教育、指導ではなく普通教育の一環として、確かな学力にも結びつく。

ここで確認させていただきたいがいろいろなものづくりの技というのは、知識詰め込み型ではなく正解は一つではない。ニーズに合わせてこんな技法もある、こんなやり方もあるというものである。そんな面で平成21年度からものづくり教育プランの作成を進めていただきたい。プログラムは一つの学年で3単元ぐらいあるので、全市同じ単元と地域の特色も踏まえた単元を考えていくとよい。

(白鳥委員)

16 ページ、生徒指導の充実のところの現状の記述で3つ目に生活習慣の乱れが指摘されている。学力向上にかかわって子どもたちの毎日の生活、学校生活、家庭生活、地域生活等の生活習慣の実態を総合的にみると、学習環境に影響する生活的、精神的な部分がある。それらが学力向上の阻害になったり、生徒指導上のいろいろな望ましくない生活行動として出てきたりする。やはり、どこかで子どもたちの総合的な人格が見えてくる日々の実態が分かるような調査・アンケート等を工夫してほしい。

(柴野委員)

新たなことを取り組むには、組織全体で目標に向かって取り組むことが必要。20 ページにあるが、ぜひとも大学も含めた人的支援、それから、財政面での支援をお願いしたい。中途半端なことではなくしっかりとした支援をお願いしたい。

(鈴木さゆり委員)

19 ページの2の学校設備・支援の充実で、(2) 人的支援のなかで、中1ギャップを解消するために小学校英語教育、小中一貫教育のための市単独の講師を採用するとある。モデル校において中1ギャップのメインとなる小学校5年生から中学校1年生の子どもたちに精神的な支援をする講師というのもこのなかで考えているのか。

(駒澤学校教育課長)

ここに書いてあるのは、あくまでも英語教育の充実のために充てるということで考えている。モデル校の支援も市独自の講師の採用を予定している。

(鈴木さゆり委員)

教育補助員やスクールアシスタントも小中で行ったり来たりするということを考えているのか。

(駒澤学校教育課長)

そこまでは考えていない。教育補助員やスクールアシスタントの活用は本来のねらいがあり、それに沿って校長先生の指導のもとで実施されるものである。

(鈴木さゆり委員)

子どもたちの精神面が安定することで、学力向上が図られると思うので、保護者の立場から、心の安定の面からも人的配置を考えてほしい。

(金子副委員長)

20ページ、課題4の関係機関との連携強化に小中校長会との連携が入っている。先般、9月の小中校長会で勉強会を実施した。その中で出てきたことを話させてもらう。

教職員が三条市の小中一貫教育における理念と意図をしっかりと理解していることが前提になる。この説明で地域への説明、成果の検証等ともあるが、学校への説明もあると思う。それをより充実したものにしていただきたい。さらに、実際に小中一貫教育を導入している市町村を見ると、教育行政関係の強い指導のもとで推し進めている市町村ではかなりの成果を挙げているが、各学校、地域にお任せして、こう指導案を作ってください、こういう理念ですからがんばってやってくださいというふうにされたところはあまり成果があがらず停滞の状況にある。このような意見があった。

是非、教育行政が全部やれるわけではないが、各学校、各地区と協力する際に十分に理解していただき、この課題に提案してあることをしっかりと進めてほしい。

(松永教育長)

教職員への理解や周知徹底は十分やっていきたい。そのためには校長先生方からリーダーシップを発揮してもらわないとうまくいかない。校長先生方にまず十分理解していただいて職員を指導していただくようお願いしておきたい。

それから、行政のリーダーシップが必要だということは理解できる。行政としても、人的支援などを十分配慮していきたいと考えている。

(白鳥委員)

14ページに期待される効果ということで4つの効果がある。語尾が「○○します。現れます。高まります。向かいます。」と宣伝のように終わっているが、教育長や金子副委員長の話を勘案すると教師が一生懸命取り組めば必ずその効果は現れてくると信じている。しかし、今まで話し合われたことを行う場合には、新しいことなので学校現場の多忙に拍車がかかる。今までの実践等を十分勘案して、どのようにアレンジしていったらこの市の方針に近づくのかという視点で考えるとこの部分はやってきたという部分もあると思う。そういう面で配慮してほしい。

もう一つは、小中一貫教育で4・3・2という区分にすると今までの6・3制の大雑把な見方よりも細くなった分、先生方の取り組み方がよりきめ細かくなり9年間の指導観で推進したら、子どもたち一人一人が元気になっていく気がする。

(雲尾委員長)

これを基に専門部会が終わり、次回は全体会となる。先程の方向で多少修正することになる。この方向でよいか。

(金子副委員長)

10ページの図で、指導充実期、活用期、発展期という言葉があるが、説明を聞いて

て分かったけれどこの表だけをホームページに出されても何が指導充実で、何が活用で、何が発展するのかという言葉の意味がちょっと分かりづらい。それぞれの期の説明があるともう少しイメージしやすくなる。

(駒澤学校教育課長)

指導充実期は義務教育のスタートの時期であり、基礎的な事項を充実させる時期である。活用期は、低学年で培ったものを自分が考えるときに使って問題解決し、自らの考えを高めていく時期。発展期である中2・中3は義務教育のまとめの時期であり、高校進学もあるので自己実現を図るために自己の伸長をさせたりする時期ということでこのように表現した。

指導充実期という言葉の表現については検討させていただきたい。

(雲尾委員長)

確かに指導充実期の後には「指導」が出てこないの、指導していないのかなということにもなる。今の説明では基礎の指導を充実させるということなので、指導充実という言葉では誤解を招くことがある。

(坂内委員)

これが原案として承認されると全体会で話し合われ、教育委員会で審議され、そして議会にかけられる。そこでは、予算の措置が現実として出てくる。小中一貫教育を実施するのはよいが、三条市は財政が困難なので、財政的にはこれだけしかないの、この範囲でやってくださいとならないように、行政措置も含め、予算的、人的な面をしっかりとさせていただきたい。

(左近委員)

現に小中学校の連携教育をされているところがあるが、実際に一体型ということになるとなかなか財政的には無理がある。現実的に考えられるのは、最終的にせいぜい併用型なのかなと思う。財政的にはなかなか厳しいという思いがある。

(雲尾委員長)

財政面の心配が出たが、施設等専門部会では、老朽化校舎、危険校舎等の改築等を考え併せると一体型の校舎を作ったほうがいいのではないかという意見も出てきている。次回の全体会で施設等専門部会の報告を聞いて考えていただきたい。

では、今後の基本的な方向について提示されたものについて、多少文言を訂正して全体会に出すということで、協議の部分を終わりたい。

(4) 閉会

今後、中間報告書の作成を考えている。次回は、10月の月末11月の上旬で日程を調整したいのでよろしくお願ひしたい。